

宗教とは？

中西智海先生の文章です。金子大栄先生から学んだお言葉に「人生は道なり。道とは自らの責任において歩むものなり」と、もう一つは「念仏は人生への姿勢を教えるものである」

「宗教とは何か」を教えない国を私は知りません。宗教とは人生の究極的な意味を明らかにし、人間の究極的な解決にかかわる文化現象である。(岸本英夫)

決です。宗教とは人生の究極的な意味です。これだけはきちつと腹の中へ入れておくべきです。仏様の話と云ったら「ああ、向こう側の彼岸の話か。今は金と教育のことで頭がいっぱいだ。こんなに忙しいのに彼岸の話とか、仏の側のお話なんか何になる」という人がいますが、宗教の出発点は、人間のいのちと人生とをしっかりと見つめることです。

価値があるんや、教えてちょうだい」と言いますが、そういう発想がもはや宗教的ではないのです。「価値があるかないか」という問いは、「あつたら受け入れて、なかつたらやめておこうか」という発想です。そんな程度で宗教を尋ねるんですか。この賜りたる命をなんとしても意味づけの出来る人間になれ、

深く生きる人生 それは 目覚めて生きる人生 松扉 哲雄

ホー ム ペー ジ 改 葬 - さ ん わ

日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL(0977)72-6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トライアル横) TEL(0974)22-3301
森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL(097)524-6525

さんわ便り

第160号 所部 行グル 報部 さんわ グル 大分 編集 森町

自力とは何か。

すでに何回も申したと思うが、今日 間違えられてるのは、自分の力、自分の努力を自力というのだと思ってる。これは間違っている。自力とは人間の持つ迷い、自己中心の迷いという。千年程前に中国の曇鸞(とんらん)という人が使われた言葉である。親鸞聖人はそれを具体的に言っておられる。それを唯信鈔(ゆいしんしょう)文意の中に四つ定義されている。

かな心や間違いを賢げに反省を加えて、私はもう駄目だ、生きていく意味もないという程に自分を責めさいなんて、深い劣等感に陥っていく。自己卑下の心。(四) 人をよしあしという冷たい批判をいう。対象化をいう。この事は何回も申したと思うが、今は対象化ということに中心をおき、この心が自力であり深い迷いなんだということ

それを自力という。分別心というのは理想主義的な見方。理想主義の立場をいう。理想主義とは、何が悪いかが善いか誰もわかっていない筈だ、善い事をやろうと思えば皆出来る筈なのに、やろうと思わぬからできないのだという。努力をしてゆけば、かくあるべきという姿にやがて達する筈だときめつけていくのが理想主義の立場である。これを分別と云う迷いという。なぜ迷いであるのか。出来る筈だと言っている所に深い自己肯定がある。そしてもし出来なければ卑下して俺は駄目だという。これを自力という。対象化の立場である。対象化とは向こう側において傍観者として見ているのである。向こう側に見る限り本当のものの見方はできない。冷たい批判しかできない。

現代の一番大きな問題の一つはこれである。たとえば学校教育は、知性を中心にして知性を磨きあげていって、物事をよく理解し観察していくというこ

をするというの、その人がまだ本物でない証拠であって、従って耳四郎の信心は本物ではない、このように我々は言いたい。が耳四郎が死んだ時には(伝説ではあるが)金色まばゆい仏となったと書いてある。真田増丸先生は盲腸が痛み腹膜炎を併発して亡くなられた。その死の間に「痛い痛い」と言われた、天下周知の真田増丸先生ともあるう人が痛い痛いで死なれては困ると思つたのか、弟子達は「先生どうぞ念仏を」と言った。先生は大喝一声「何を言うか、それはもう済んでおる。今は痛いんじや」と言つて死なれた。この人の信心は本物であろうか

細川 巖先生の 歎異抄購読 第5章 現実人生と未来 より 自力・・・私自身もまだ深くわかりません。み教え 遇う、光に(おおきなもの) 照らされ育てて頂く・・・ 聞法、聞光・・・渡辺